



民主教育をすすめる和歌山県民連合 和歌山市雑賀屋町東ノ丁 50(高校会館内) TEL 073-432-6355
◆地域や団体の取り組みをお寄せください(⇒和教組 wakyoso@wkn.or.jp まで)

これからの高校教育について語ろう！

和高教「和歌山の高校教育を考える」意見交流集会を開催

高校入試を終えたばかりの3月13日、「和歌山の高校教育を考える」意見交流集会が、開催されました。

集会のメインはパネルディスカッション「これからの和歌山の高校教育について語ろう！」。越野章史氏(和歌山大学教育学部准教授)をコーディネーターとして、地域・保護者、中学校教員、2人の高校教員の4人のパネリストによって意見交流を行いました。パネリストのみなさんの発言から共通してあふれ出していたのは、それぞれの立場で子どもたちにしっかりと寄り添う温かいまなざしであり、そのまなざしにとらえられた子どもたちの真実の姿でした。現在の教育現場に広がる矛盾を告発するまなざしは鋭く、多くの参加者の共感を呼びました。

パネルディスカッションの最後で、コーディネーターの越野先生から「今回のことを契機に、高校教職員・地域・保護者の間で、高校教育の議論を深めていってほしい」と呼びかけがありました。

今回のように高校生の姿を真ん中においた議論を、小さくても地域からつなげていくことで、ボトムアップの「これからの高校教育のあり方」が見えてくるのではないのでしょうか。そこに至る道りは長いですが、ともに一歩ずつ歩いていきましょう。

【パネリストのみなさんの発言要旨】

森橋 美穂さん

(高校学校運営協議会委員・ハートフルハウス「創」施設長)

不登校やひきもり支援の活動をしていて感じるのは、「遠距離通学」「学力偏重教育」の弊害。青年期の子どもにとって必要なのは、仲間や地域と

の関わりの中で人格を豊かに育むこと。高校の授業を見学して感じたことは、やっぱり40人学級より少人数学級での授業の方が、教員と生徒との信頼関係が築きやすいのだということ。そういった環境の中でこそ、「自分が自分であっていい」と子どもたちは思うことができる。県教委がすすめている高校の特色化は、多様性の排除につながり、孤立化を招くことにつながるのではないかな。共生社会を実現するためにも、誰にとっても、近くに安心して通える学校がある、ということが大切。

寒川 幸久さん

(中学校教員・和教組日高支部書記長)

中学生はすでに1年生の時点で、高校進学先を意識している。彼らや保護者の多くは、「近くの学校に行きたい」と希望していると感じる。しかし、現実として全県一学区制下において高校が序列化されてしまっている中で、輪切りの進路指導になっているという一面もあり、反省している。地域の子を高校で奪い合うことのないように、全県一学区制を見直し、地域の子どもたちが地域に残るような手立てを講じるべきだと考えている。高校に進学した子どもたちには、自分のペースで学び、自分の進路についても自分のペースで考え、自分が行きたい進路を自ら選んでほしい。高校がそういう場になるように、教員の数を増やして「質の高い教育」を保障するべきだ。国や県をそういう姿勢に変えていけるような運動を地域からつくっていききたい。



津田 敏宏さん

(高校教員・和高教第2支部)

高校の「役割の明確化」は必要だとは思うが、トップダウンで決められるのはおかしい。特任高校を和歌山市内に2校配置するという考え方は、あまりに和歌山市周辺地域を偏重しており、教育の機会均等の観点からまったく理解できない。今、地域にはグローバルな課題も含めて教育資源が豊富にある。現任校では、ボランティア活動を通して地域と関わる機会が多く、主体的な学びに生徒は目を輝かせている。卒業生に話を聞くと、彼らは小規模校ならではの「教員や他学年の生徒との距離感の近さ」に居心地の良さを感じており、「活力は大規模校でしか生まれえない」というのは私たちの思い込みに過ぎないのではないか。序列や入学定員にとらわれることなく、どこの地域に住んでいても、自分の求める高校教育が受けられる、そんな社会が理想だと考えている。

雑賀 靖子さん

(高校教員・和高教第4支部)

「地域の学校はどうあるべきか」今まさに、現任校が直面している課題。和歌山県の教育行政を見ていると、和歌山市偏重で、紀南地方は切り捨てられていると感じている。「地域に貢献できる人材づくり」というが、要は「地域の産業を支える」ために低賃金で雇える「人材」をつくらうとしているのではいかと、腹立たしささえ感じる。高校・地域のいっそうの序列化につながるこのような「カテゴリーの整理」には絶対反対。県教委の説明を聞くと、「私学を見習え」「地域の公立校は努力が足りない」と言われているようで、モチベーションが下がる。歩いて通える範囲の校区内の高校に、地元のさまざまな高校生が集まって学んでいた自分の高校生活には本当に満足している。地域の方には、生きづらさを抱えている生徒が過半数の高校のありのままの姿を見てほしいし、その現実をふまえた教育条件整備こそ、行政に強く望みたい。

【コーディネーターのまとめ】

越野 章史(和歌山大学教育学部准教授)

フィンランドの学校の先生は「フィンランドでは、学校を『選ぶ』必要がない。なぜなら、どこの学校でも同じ質の高い教育が受けられるから」といきいきと語る。さまざまな背景の違いはある

が、私たちの目指すべき学校の姿がここにあるのではないか。子どもたちが成長にしたがって、進路が分化していくのは当然ではあるが、今はあまりにも「分化」が低年齢化し過ぎではないか。「進路選択の自由」というが、実態は序列化の中で「選ばされている」に過ぎず、これだけ成熟した社会で、早い段階で進路選択を強いるのは不自然。県教委は、(カテゴリーの整理は)序列化ではなく特色化だと説明しているようだが、これまでの経過が示すように、間違いなく序列化につながる。未成年者の死亡原因第1位が自殺であり、その原因の第1位が「学力・進路・入試」というこの国で、県教委が示す再編の方向は到底受け入れられないのではないか。今回のことを契機に、高校教職員・地域・保護者の間で、高校教育の議論を深めていってほしい。

高校存続の声を広げよう！

日高・高校教育を考える会の設立に向けて

日高地方では、日高高校・紀央館高校の存続を求める声を広げようと、「将来の日高地方の高校教育を考える会(仮称)」の立ち上げにむけてとりくんでいます。

退職した教育長や高等学校長などが呼びかけ人となって、2月23日に考える会(仮称)の結成に向けた準備会を開催しました。日高地方の校長会や自治体首長、議会、高校同窓会、PTAなど多くの方に呼びかけたところ、35名が出席し「県教委による一方的な高校再編計画の進め方は良くない」「日高地方に応じた高校教育のあり方について考える」という共通認識がもたれました。

現在、呼びかけ人を中心として考える会の体制づくりを行っており、地域の方々を交え学習会を開催したり、署名活動を計画しています。また、すでにみなべ町で発足している「南部高校の未来を創造する会」とも連携してとりくみをすすめていく予定です。

県内で広がっていく県立校再編問題をめぐる動きをお伝えしようと、このニュースの発行にいたしました。「広げる」という意味の「expand」に、和歌山らしくパンダをかけて表題としました。